横浜市立富士見台小学校　学校だより　第 511 号

令和8年9月 30 日発行　10 月号

ふじみだい

校長　　田村　憲一

「下描きは『ゆうれいの線』で描くといいですよ。」

図工の時間のこと。先生はこんな説明をして、ご自分でもお手本を画用紙に描いていました。座っている子どもたちから見えるか見えないかくらいの、細くて薄い線です。先生のお手本をじっと見ていた子どもが、おもむろにつぶやく声が聞こえました。「校長先生の前髪くらいだな…」

「髪の毛」とか「白髪」といったストレートな表現ではなく、「前髪」と表現したところに、そこはかとない趣と思いやりを感じました。ゆうれいの線かぁ…とため息をつきながらも、子どもがコツとイメージをつかんだのであれば、ゆうれい線を誇りに思います。と自分に言い聞かせる 2 時間目なのです。

うちはいらなかったかなぁ



教育委員会から、「カスタマーハラスメント」に関するポスターが配布されました。学校現場では概ね好意的に受け止められているようで、それだけ保護者との関係の中で困っている学校が多いということなのでしょう。「うちはいらないかぁ…」とも思いましたが、同じ情報を保護者・地域と共有することも大切ですので校内に掲示していますが、若干の違和感はあります。

このポスターに例示されている行為は、相手がだれであっても（子どもであっても）控えるべき当たり前のことですし、そもそも保護者は「カスタマー」ではありません。このあたりが「若干の違和感」につながっているのかもしれません。

昨年度の学校だよりにも書きましたが、子どもの教育について「第一義的責任を有する」のは保護者です（教育基本法第十条）。学校は保護者とともに、「心身ともに健康な国民の育成を期して」教育を行っています。つまり学校は、子どもの成長を教育面で支える「伴走者」であり、保護者と学校は「良きパートナー」です。ばかにしたりあやまらせたりする間柄ではありません。子どもを真ん中に置いて、子どものより良い成長を願ってお互いが敬意を払う関係性です。

保護者と学校がお互いに「敬意を払う」時、大事なことが二つあると思っています。ひとつは、**「すべての保護者、すべての学校は、子どもをよくしたいと思って育児や教育をしている」**ということです。だれも、この子を悪い子にしてやろうなんて思っていないのです。もうひとつは、**「よくしたいと思って行っていることが、うまくいかないときがある」**ということです。子育て・教育が難しいのは、「昨日はこのやり方でうまくいったのに、今日はうまくいかなかった」や「この子にはこれで成功したけれど、別の子には失敗した」があることです。さらには、失敗だと思っていたことが実は成功だったり、その逆もあったりします。答え合わせが何年も後になることだってあります。

学校では、子どもが笑顔で登校してきた時には、「おかげ様」の気持ちをもちたいと思っています。そして、「なんかうまくいっていないな」と感じるときは、相手に敬意を払って相談したいと思います。

このポスターは今も掲示してあります。でも、やっぱりうちはいらなかったかなぁ?って思いつつ…